

まなべ歴史通信

第57号
2010.12.1

「大子町歴史資料館」の設立に向けて

茨城県立歴史館は、県庁各課が業務遂行のために作成した起案文書や收受文書、いわゆる行政文書（公文書ともいう。）を収集し、歴史的資料として後世に残す業務を行っています。

県庁や市役所・町村役場で業務遂行のために作成・收受された文書を、県民・市町村民のかけがえのない貴重な財産として後世に伝え、公開していくことは、開かれた行政を推進するばかりでなく、新たな地域文化の創造に資することになります。

歴史館の行政文書は、評価・選別・整理・補修、製本という過程を経て、文書完結から三十年を経過した時点で公開し、歴史館として、広く県民の一般利用に供しています。

歴史館では、毎年、市町村の職員を対象とした研究会や研修会を実施して行政文書を保存する意義についての説明等を行つてきました。今年度も十月二十一日に「市町村公文書管理担当者研修会」を実施しました。そこで、「公文書管理法の趣旨と意義について」の講演がありました。

平成二十一年六月二十四日、「公文書等の管理に関する法律」が成立しました。その第三十四条では、「地方公共団体は、この法律の趣旨にのつとり、その保有する文書の適正な管理に關

して必要な施策を策定し、これを実施するよう努めなければならぬ」と市町村に努力義務をうながしています。

常陸大宮市では、平成二十二年三月の市議会で、「公文書館関係につきましては、平成二十一年度に引き継ぎ、市が保有する貴重な行政文書や歴史的文書について評価選別作業を実施いたします。二十二年度においては、保管施設の選定、保管方法や閲覧方法の検討を行い、開設に向けての準備を行つてまいります。」と施政方針が述べられました。十月二十一日の研修会でも、常陸大宮市の方が、公文書管理法に対する準備状況について、「五つの市町村が合併して（大宮町・山方町・美和村・緒川村・御前山村）、平成十八年以降の文書を整理している。常陸大宮市は、公文書館設立に向け、十一月二日に第一回の会議を開催する予定です。公文書館の場所は、旧塩田小学校の廃校利用で、場所は決まっています。ハード面、セキュリティ面を手がけています。中身のことなど、順々に進めていきたい」と述べています。

大子町でも、廃校した小学校の施設を活用して公文書館を設立することができないでしょうか。公文書館的機能ばかりではなく、歴史館的機能をそなえた「歴史資料館」ができないでしょうか。大子町は、映画「桜田門外ノ変」のロケ地となり、本田博太郎の演じた「桜岡源次衛門」で表現されたような人物、豊かな歴史が存在します。大子地方を描いた『神無月十番目の夜』、『天狗争乱』、『常羽有情（佐竹義宣）』などの本が出されています。以前に特別展「水戸藩主・光圀と齊昭の巡村」を大子町中央公民館で実施し、たくさんの方々が訪れました。「袋田の滝」の観光とともに、「歴史資料館」で、自然、民話・伝説、民具・生活、歴史、文化を学び、考えることが、これからの大子町づくりのために、期待されるのではないでしようか。（野内）

『生きた証・私の抑留記』(二)

全国強制抑留者協会茨城県支部長

須藤富之助

日ソ不可侵条約を破棄して参戦してくるソ連、間もなく迫り来る八月十五日の日本の無条件降伏をも予期せず、私たちは「将校生徒の誇りをもつて」日頃、将校道の教育に日夜精進し一人

前の下級下士官として来たるべき日に備えて懸命に修行に邁進していた。しかし、幹部候補生としての自覚と将来への期待をもつて修練に励んでいるとき、戦雲は極めて不利なる戦況に追い込まれていたのである。

「第二区隊長、渡辺義昭陸軍中尉隊付荒木弘見習士官髪髪」として臉に映す、そんなところまで追い込まれた最悪の事態を知る由もなく、昭和二十年八月十五日を迎えたのである。自分は当日、平壌の官舎警備の壕掘作業に出勤していたが、急遽引き上げ命令が発せられた。要領を得ない命令で、不審に思つていたのであるが、民間人から重大な声明があると聞かされ、待機したのである。各部所に出勤していた各隊も続々と帰隊して來た。營門に入るや否や眼前に映つたのは、同輩達が完全軍装も勇ましく、実弾を受領し、警備のための任地に出発するのであ



幹部候補生のころ

る。

昼食後、

「全員営庭

に集合せよ」

との区隊長
の指示によ
り、全候補
生は中隊縦
列の隊形で

兵舎に對面して隊列を整え、隊長に對しての敬礼後、部隊はコの字形に隊形を整え拡声器を備えた。

○昭和二十年八月十五日一敗戦そして三合里へ

正午十二時。重大声明を聞く準備は完了した。しかし、ビー、ビー、ピピーという雜音が余りにもひどく、意味が聞き取れず、さっぱり分からなかつたと思う。そこから想像したことは、いよいよ雌雄の決戦の段階に入り、加えてソ連の参戦などを耳にしたので、いつそうの激励をと誰もが真剣な心境であつた。武装を整えて出動していくた同僚を思うとき、果たして何処へと疑つた。

時局は、我々が考えているような戦局ではなかつた。原子爆弾の威力の凄まじさや玉音放送のことが解説されていくことによつて日本の敗戦を知り、血の氣の失せる思いであつた。一千余名の幹部候補生も、今は全てを失い、死を決する者さえあつたのである。無言のうちに隊形は乱れ、歩兵中隊長森野少佐は、中隊舎前に全員を集合させ、今後の進むべき方針について述べたが、声がかすれて日頃の威厳を全く失つていた。

平壌市街地では、各種団体の崩壊が問題となつた。また、朝鮮人の暴動が大きな混乱を招いた。朝鮮人の中で優秀な者は幹部候補生として教育を受けていたのであるが、あの十五日の夜、逃亡を試みた者もあり、軍部の力で押さえていただけに、その反動的行動は大きかつた。日が経つにつれて各地からの騒動の情報が入り官舎の警備と各地区の治安の維持に警戒の隊伍が編成された。教育隊には一部の残留部隊をのこして、中和地区、鎮南浦アンガクニほか、各々地区へ治安維持と警備のために出動していった。自分は本部付けとして、中和地区的貨物廠の警備に赴いた。この貨物廠には軍需物資が備蓄されていた。主として朝鮮軍の食糧及び衣服関係の物資であつたが、警備をしながら食して日々を送ることができた。

一方、部隊の大移動がはじまり、京城（現ソウル）へと、南下していくその姿を見るとき、あの日本國軍人の面影は何処にもなく末路のあわれさをつくづくと感じさせられた。それに對し、前に触れたが、自分の警備は貨物廠であったから、毎日肉、飯や乾パンを食べ、そして砂糖水を作つて飲んで、毎日、毎日満足な日を過ごしていた。

そんなある日、突如として治安隊と称する朝鮮人が自動車二台で警備区域を襲つてきたのである。自分たちは咄嗟に抵抗すべきでないと判断し、彼らの意のままに従い、一応の申し送りをして教育隊に引き上げた。衛門を入れると、自分たちの中隊には、幹部候補生の仲間が収容され、将校達は本部に、下士官兵は第一中隊の兵舎にと、ソ連の命により区分されていた。いいよい明日は原隊復帰の日である（原隊は朝鮮第四十二部隊）。すっかり装具を整え、明日への準備に備えた。しかし、全くあてがはずれた。九月一日午後十一時「三合里」の兵舎に集結命令が出たのである。「三合里」は、自分が召集された原隊の最初の演習地であった。また、その命令がふるつていた。

「三合里」への全員集結は、内地帰還の前提であるというのである。早速その準備で大騒ぎとなつた。自分は大きな梱包を二個ついた。内容は被服一切、いずれもたくさん持ち物である。内地へもつて帰つたらどんなにか喜ばれるだろう？そんな期待もあって欲が出たのである。

第五十部隊原隊である第四十二部隊平壌師団管区の部隊は、三合里街道を延々長蛇の列をつくつて三合里に向かつた。背負つた荷物のため、肩の感覺を完全に失い、身体が堪えられなくなつてきた。夕方四時ごろ、「三合里」の一里くらいのところまで部隊が到着したとき、三合里よりソ連の将校級の兵士がやつてきた。はじめて見るソ連人の印象は、赤ら顔でアルコール

コールを浴びるほど飲んだような容体、目の独特の光り、東洋人としてそのように感じたのである。九月の太陽は西山に没し、辺りが暗くなつてきた頃、苦労の行軍でやつと「三合里」に到着した。

○最初の収容所、三合里収容所の生活

三合里廠舎の入口は、非常に混乱の様相を呈していた。各々の荷物は一個に制限された。とうとう入所である。妹尾君の後について行く。入口の両脇にロスキー（ソ連兵の蔑称）の兵隊がローソクをかざし、その明かりで目を輝かし、獲物を睨む猛獸のような形相で自分たちを凝視しているではないか。妹尾君が捕まつた。何を言われているのか、さっぱり分からぬ。妹尾君の腕時計がロスキーの目にとまつたのである。あっさり没収されてしまった。彼は小銃を持っていたので、何の抵抗もすることもできず應ずるほかはなかつた。その晩は長い道中の行進と重い荷物を背負つた疲れでへたばつていた。草の生え茂った原っぱで夜露を受けて一夜を明かした。

夜明けを迎えて驚いた。三合里廠舎の中には、一極の各部隊から集結した兵隊で埋まつていた。誰もが顔を見合わせて、不安の色は隠しきれなかつた。いったい、今後どうなるのだろう。自分たちは、実質的に抑留者となつたのである。そして、収容所生活がはじまつたのである。

各人は、それぞれ梱包の中に食糧を何日分かは所持していた。最初、何日かは三食の自活生活がはじまつた。一本の木片がこんなに大切な燃料であることを切実に感じたことはなかつた。生米を食べることはできない。飯盒炊飯のために被服類が次々と燃料になつてしまつたのである。あの広大な収容所には紙屑ひとつ、木片ひとかけらも見あたらなくなつていた。燃料になる物は、ほとんど燃やされ尽くしたのである。とうとう困却してしまい、今

までやつてきた方法を改め、十月末からは大隊炊事が実施されるようになった。

当時、まだ白米や肉も食べられ、食糧もまだ恵まれていた。収容所での大きな仕事は、薪採りである。四日に一度、あるいは五日に一度ぐらいの割合で松の木立の山へ、ロスキーの引率で行くわけである。最初は近距離であったが、三万人からの大世帯であるから辺りの山林はみるみるうちに伐採されていった。薪採り、薪割りなどの使役を待つ時間は、遙か故郷の親兄弟や友人を想い、いたたまれぬ焦慮に耽つて仲間と語り合つた。三々五々と集まりができて語り合つて、内地帰還を願っていたのである。

そんな矢先に、内地帰還命令が出た。第一隊、第二隊と五〇〇〇名の部隊が「三合里収容所」を後にした。次は自分たちの番だろうと、今日か、今晚か、明日かとの命令を出るのを待つていた。何の音沙汰もなく、昭和二十一年の正月を「三合里収容所」で迎える覚悟をしたのである。

昭和二十一年一月一日、正月は来た。全員広場に集合して四方拝（元旦午前五時に四方の心靈を遙拝する儀式）を行なつた。その折り、野口大尉の新年の辞がふるつていた。

「御目出度う。今年こそ内地帰還の年である」

この年頭の辞で、今年の十二月までは帰れるだらうと思うのが誰もの考え方であつた。四季の春はめぐりきたれど、我らの春は来たらず、いつこうにその気配すらなく暗い思いに落ち込んでいた。そんな折、五〇名あるいは一〇〇名くらいが収容所を出ていった。内地へ帰還する様子ではなかつた。日本軍が破壊していく航空隊関係施設、兵器廠等の整理作業であつた。

四月二十八日、暖かな日であつた。丁度正午頃倉本部から当大隊に隊外使役五〇名を準備して広場に集合するよう命今が達せられた。自分は五〇名の一員として使役労働に出ること

にした。門前にはアメリカ製の俗に言う重輪車（重輪氣動車）が待つていた。「いつたい何処につれて行かれるのだらう」と、不安だつた。飛行時間二時間かけて平壌西方にある美林の飛行場についた。この飛行場での作業は、滑走路づくりであつた。ある程度平らにならしておいたところへアメリカ製の鉄板を繋ぎ合わせいくと、立派な滑走路ができるてしまうのである。アメリカ軍がこんな方法でやつたのかと思うと、感心と驚きであつた。約三十日間の労働力によつて見事な滑走路一本と、補助滑走路が二本完成した。さつそくソ連の最新鋭の戦闘機が乱舞していた。

○二番目・秋乙収容所へ

滑走路工事が、概ね一段落がついたとみるや、「秋乙の収容所」に集結せよとの命令が下り、先発に來ていた一〇〇名、自分たち五〇名、計一五〇名は「秋乙収容所」に入所した。それは、昭和二十一年四月三〇日と記憶している。ここで仕事は平壌の航空廠の雑役が主であった。航空廠の往復に、邦人の子どもたちが小さな家から出てきて、「兵隊さん、兵隊さん」といつて追いかけながら言葉をかけてくる。子どもながらに感じ取つているいじらしさ、身のつまる思いに返す言葉さえ知らなかつた。隊員の中で自分の朝飯も食べずに握り飯にしては子どもに与えていた。全く食料の入手困難な状況下であるから、無理からぬことであつたのである。

秋乙収容所での生活が慣れて來たころ、移動の話が持ち上がりつて來た。内地帰還の話である。今日は第四大隊、明日は第五大隊と編成され、時期が時期なので内地帰還は問題ないだろう。早く帰つて生きがいのある生活をしたいと、誰もが念願していたのである。しかし我々が思つてゐるような甘い考えは通用するわけがなかつた。一個大隊一〇〇〇名単位に編成されたのは、内地帰還ではなく、ソ連領にいくための編成であつたのである。不安はつるばかりであつた。

新聞記事にみる満州移民の断片（七）

—第九次冷家店大子町開拓団の軌跡—

本誌第五五号で、昭和「十五年は大きな節目の年になつた」と記した。その十五年の動きをもう少し付け加えておこう。

大子開拓団の先遣隊員一行が渡満したのは昭和十五年一月であつた。そもそも先遣隊とは、満洲拓植公社の手で予め買収準備された移住地に文字通り本隊より先に入植し、「本隊のために食料の準備、燃料の集収、家屋の準備、農具その他必需品の準備、部落の割当て、道路その他交通施設の整備、移住地区内の調査等」（満洲開拓史）に当たることを任務とした。大子町開拓団の場合、先遣隊員に続いて家族の渡満を新聞記事で最初に確認できるのは、同年七月二十三日である。この時、本誌第五五号で指摘したように、冷家店開拓団員八名とともにその家族八名が渡満している。開拓地での受け入れ体制が整ってきたためであろうか、家族の移住が具体化し始める。

家族を招致するためには、隊員が一時帰郷する形が取られた。

例えば、昭和十五年七月には隊員である吉沢勘介ほか六名が帰郷した。絶好の機会ということであろうか、同月二十日には吉沢等による現地報告会が大子町役場で開かれている（十五年七月十八日付「いはらき」新聞、以下同じ）。吉沢ら隊員七名とその家族四十名は、八月三十一日に役場での壮行会に臨み、九月二日に満州へと向かつた。もう一つ例を挙げよう。十月二十日付の同紙は、「大子町北満分村第二次家族招致部隊同町神長輝君外四十五名は懐しい母町に別れを告げ昨十八日午前八時水郡線大子発上り列車で勇躍壯途に上つた」と伝えている。開拓団の人数を増やすには家族の移住が必須であったが、もう一つ、自身の開拓民に配偶者を世話することも重要であった。

拓務省や満州移住協会は、昭和十二年頃から大日本連合女子青年団、大日本連合母の会、愛国婦人会、海外婦人協会等の諸団体と連携して婦人の満州進出の奨励運動を開始した（茨城昭和時代年表）。開拓民の配偶者として、『大陸の花嫁』とか『開拓の花嫁』と呼ばれる女性を大量に送り出そうというわけである。茨城県では、昭和十三年一月に、「一層青年女子の理解を深め移民事業有終の美をなさんがため内地にある移民団員の配偶者即ち花嫁希望者及び指導的立場にある女子」を対象にして第一回女子拓殖講習会が笠間農学校で開かれている（十三年一月八日付）。十六年八月に開催された十回目の講習会を取材した「いはらき」新聞記者は、そのねらいを的確に指摘した。「満洲国の眞の育成には常に男子進出を助ける女性の協力こそが望ましく、女性の進出なくしては男子のみの進出では充分の機能を發揮する事は出来ない」のである。従つて政府では、県では『女性よ協力せよ』と大いに太鼓をたたき笛ふいて、女性の満洲国進出を促してゐるのである」と（十六年九月二日付）。この講習会がいつまで続いたかは定かでないが、十五年度以降の五年間に四四一人の花嫁を送り出したという（茨城昭和時代年表）。

大子町開拓団員も、花嫁探しのためしばしば帰郷しているが、昭和十五年中には、五組の夫婦が誕生した。同年九月の二組の合同結婚式の場合、その模様は、「十二所神社前で永瀬町長外関係者多数列席の下に結婚式を挙行、新郎は作業服、花嫁は团服姿で力強い契りは結はれ来月上旬相たつさへで渡満大陸の沃野に聖業達成の鍵を振ふ事になつた」と伝えられている（十五年九月十九日付）。かくして、開拓団の人数は徐々に増えていった。新聞記事で判明する範囲でその人数を追うと、四一戸一〇八名（十五年十二月四日付）、一六六名（十六年七月三日付）、一八〇名（十七年一月十七日付）、約八〇戸一二〇名（十七年三月十三日付）、九一戸二五〇余名（十八年一月十七日付）と推移している。

（齋藤）

昭和の初め頃の農家の仕事【一五】煙草作り

最近、禁煙が叫ばれ、愛煙家にとつては少々肩身が狭い思いをさせられるかも知れない。こうなるまではたばこは大人になると誰もが吸っていたように思う。煙草は農家の重要な換金作物だつた。葉煙草を作るのは実は苦労が多い作物だ。

春早くから準備を始める。苗を作るための苗床を作らなければならぬ。一間と二、三間（作付けの面積によつて決まる）位の面積の枠を作り、中に落ち葉等を入れ、水をかけてよく踏みしめて発酵させる。その上に消毒した土を載せ種をまく。非常に細かい種なので、砂か土と混ぜて、等間隔に穴を空けた筒に入れ転がしてその穴から種が落ちるようになつてゐる。苗床には油紙で覆いをして保温する。その当時はビニールはなかつた。ガラスは高価なので多くの農家は油紙を利用した。灌水したり、温度の調節に日夜気が抜けない。

苗が次第に大きくなると移植する。最初はピンセットで摘んで一本一本丁寧に植える。それほど苗は小さいのだ。次第に大きくなると苗床（本床）の面積も広く必要になつてくる。五月頃多くは麦畑に定植する。麦が霜の害から守つてくれるので、やがて麦を刈つて煙草くるめと言ひその刈り株を土と共に煙草に寄せ倒伏を防ぐ。煙草は次第に大きくなり、背丈よりも高くなる。この間毎日のように見回つて虫を捕つたり、腋芽を摘んだりする。また先端の方に花が咲く様になると、花を摘む仕事がある。煙草の畝間を歩くので、煙草の葉が顔にも着物にも触れる。煙草の葉の匂いと顔や腕に粘り着くような感じで気分は悪くなる、着物は汚れるで全く辛い仕事だ。

七月八月になると、煙草の葉も大きくなり、土葉といふ下の方から次第に黄色くなつて來るので、色合いを見て搔き取る。この葉を乾燥する為に縄に一枚一枚丁寧に挟み込んで天

日で乾燥する。これを連干しという。何百枚にもなるから、連干しの場所を作つて何十連も掛ける。雨が降ると急いで取り込まなければならない。どの農家でも大慌てだ。連の両端を持たないと葉が折れたり汚れたりするので、一人では出来ない。重いし長いので子供では無理だ。よく乾燥してくれれば軽くなるので、仕事は樂になる。この時期農家ではあまり遠くへ烟仕事にも行けない。天候次第だ。

烟に残つてゐる煙草は次第に全体が黄色く色づいて収穫できる状態になる。この上方の葉は天葉という。こうなると茎の下方を切り、茎毎家まで運ぶ。茎に竹で作つた串を刺し、高いところへ掛けて乾燥させる。この方法を幹干しといふ。乾燥させる特別な場所が無い農家では、屋根裏に吊り下げる。農家の土間や囲炉裏のある部屋は通常天井が無い。囲炉裏の煙や暖氣が屋根裏まで届く様になつてゐる。これが乾燥にも良いのだが、煙草を吊り下げるのは危険で辛い仕事だ。夏になるが日夜火を炊いて乾燥させる。煙草の虫が落ちてしまつたりする。連干しも幹干しも乾燥すると出荷の準備をする。乾燥して萎れたようになつてゐる葉を、二人向きあつて手で一枚一枚丁寧に広げて重ね、決められた枚数に束ねる。何しろ数百枚数千枚の葉を全部やるのだから、葉の匂いで頭が痛くなつたり、単調な仕事なので眠くはなるという容易ではない手間の掛かる仕事だ。これを煙草のしというが、子供も手伝わされ一家総出の仕事になる。これが終わるとやがて煙草の収納になる。決められた様に包装して専売所へ運び、検査を受けて合格すればそれで終わり。合格の等級で値段は決まる。不合格だとやり直しになる。

農業では何を作つても樂な仕事はないが、煙草作りは最も辛い仕事だと思う。

(石井)

「田中愿藏刑場跡」の碑

福島県塙町の国道一一八号線沿いに「道の駅はなわ」がある。その敷地の一隅に「田中愿藏刑場跡」と「南妙法蓮華經」の碑が立っていたが、道の駅設置のために現在地に移動された。

田中愿藏は、久慈郡水府村（常陸太田市）生まれ、猿田玄硯の子で水戸藩御殿医田中忠就の養子となり、田中の姓を名乗るようになつた。水戸城下の薈義塾、弘道館に学び、その後江戸に出て安井息軒に学んだ。文武両道に秀れ、水戸に帰ると十九歳で水戸藩郷校野口時雍館（旧御前山村野口）の館長となつた。桜田門外の変以後、水戸藩士らの尊皇攘夷運動はいつそう活発となつた。元治元年（一八六四）三月、藤田東湖の第四子藤田小四郎、安食村（出島村）の郷土竹内百太郎、宍倉村（出島村）の山伏岩谷敬一郎らは、水戸藩町奉行田丸稻之衛門を総帥にして筑波山に挙兵した。この筑波山の挙兵に田中愿藏も幹部の一人として参加している。



「田中愿藏刑場跡」の碑（右）

藤田小四郎らは、東照宮のある日光を拠点として攘夷の実行をうながすために、元治元年（一八六四）四月三日、日光へ向けて出發をし、宇都宮藩に阻止され、日光廟を参

拝して栃木の大平山に陣営を定め、軍議がもたれた。この大平山の軍議に於いて、「田中と藤田は主義主張を異にし、完全に分裂し別個の独立二隊になった。藤田は攘夷に心がけて倒幕には意はなかつた。田中の主張は、討幕を主とするものであつて、然る後に攘夷に及ばんとするもので全くの正反対であつた。」（『水戸天狗党遺聞』）。この対立により分裂は当然であつた。

これ以後、田中隊は三二〇名程度に過ぎなかつたが、尊攘派の藤田隊から離れていく。軍資金の背景のない田中隊は、隊員の食糧補充のために資金を求めて栃木町や真鍋宿（土浦）の焼き討ちを行つた等の理由により、筑波勢本隊から除名された。

その後、田中は孤軍奮闘をしながら那珂湊に向かうが天狗勢本隊には受け入れられず、那珂湊で諸生党や幕府の追討軍と戦い、一時助川城を占拠した。しかし、追討連合軍の大軍に攻められ、抗戦不能となり藤田小四郎、武田耕雲斎らの那珂湊脱出に先立ち、九月二十六日助川城を脱出し、北の山間地方に逃れた。久慈川をさかのぼり大沢口から八溝山に登つた。九月二十九日午後、田中隊は八溝山頂に到着した。別当に七〇両を送つて食糧を依頼して置いたが、もみ三俵あるだけで人影はなかつた。十月一日田中隊は、八溝神社前で解体のやむなきに至つた。十月一日田中は、単身下山し、真名畠村（塙町）山奥の小屋で休息。四日早朝塙代官所役人に捕縛されて入牢した。十六日田沼意次の命により塙の久慈川の下河原の刑場で斬首された。刑場跡の「南無妙法蓮華經」と刻してある石塔は、慶應元年（一八六五）塙の番人半兵衛によつて供養のために建立されたものであり、「田中愿藏刑場跡」碑は、昭和四年（一九二九）地方有志らによる勤皇功績顕彰会によつて建立されたものである。一方、筑波勢の藤田小四郎、田丸稻之衛門、武田耕雲斎らは、那珂湊を脱出し、大子に集結。軍議をもち、隊を整え、十一月一日京都を目指して西上の途についた。

（小澤）

武助の手紙
まへり食はる事
居ゆる所 寄宿町
あらゆる事
ちゆふに仕事
品木村
経手せば
種子一束
おもむく
八月廿五日
候存致
光圀は、会津から林檎のほを取り寄せ
武助に五つ送っている。また、武助の息
子孫三郎が西山に勤めており、武助の妻
の心情を察した文面が書き添えてある。

以書付令啓上候此りん
きん五つ會津より御取
寄被為遊候實植ニ
仕候様ニと被仰出候間
大切ニ被成御植可被成候
只今より植置申候欵
能御座候植申ニ此ま、御
植可被成候核斗取候而
植申ハ悪敷御座候
先以御堅固ニ被成御座候や
承度奉存候此方孫三郎殿
御首尾能御勤候間可
御心安候久々御帰り無之
御内儀様御床敷思召
候半と存候以上

野国飯村城主（茂木町）の子孫である。先祖は代々北豊臣秀吉の北条氏征伐の時、飯村城も落城し、難を、関東を転々し生瀬に移住した。更に町付に転住し、の時、佐竹氏の客分となつた。その後弥吉宗勝の時、となつたが町付に残つた。

八月二十五日（元禄十年九月）

八月二十五日 鈴木宗与

ふるさと歴史講座現地巡り

菊池信也

「菱醤油」の小瓶など、だいた。

九月二十六日（日）秋晴れの一日、大子町生涯学習課主催のふるさと歴史講座に参加した。一行二十八人、小彦園彦

先生、齋藤典生先生、野内正美先生、石井喜志夫先生、事務局（生涯学習課）齋藤裕也さん、皆川敦史さん、そしてバスの運

転は、ベテランの堀江さん。私たちは石井喜志夫先生の古文書研究会の仲間と俳句愛好者と誘いあつての参加、バスの中では小澤先生による訪問地の解説、案内を聞き、ふるさとの歴史を勉強し、現地巡りを楽しんだ。

今回は、特に徳川光圀公ゆかりの常陸太田市を訪ねた。光圀公は、大子町史によると大子地方へは十回も訪れているとのことである。常陸国は江戸時代まで佐竹氏の支配であつたが、秋田に移封されてしまい、代わって水戸藩の支配となつた。

最初の訪問地の佐竹寺を経て西山荘へ、大杉の林立する道を歩くと、時代劇で知られた西山荘に至る。心字池を配した質素な様式の平屋建てで、大日本史編さんの書斎には丸窓が見られる。

大日本史の丸窓古りし 蟬しぐれ 信也



・常陸太田市のボランティア会員から「丸窓のある書斎」の話を聞く講座の参加者。丸窓から採光した三畳の部屋、窓際には梅を植えて勉学の戒めとされたという。梅は「学問に励めば梅が開く」という故事にちなんで好文木と称された。光圀公はここで大日本史の草稿などをご覧になったという。

しばし、散策の後、西山公園の高台にある久昌寺、義公廟を訪ねた。初秋の太田を眺めながらここでお弁当をみんなでひろげた。女性たちは早起きして作ったと思われる自慢の手料理をみんなに配る。いなり寿司、いちじくのワイン煮、きゅうりの浅漬け、奥久慈りんご、なし、そしておにぎり。正に味覚の秋、人も肥ゆる秋だけなわけである。

昼食後は、義公廟を後にして、「ヨネビシ醤油蔵」に立ち寄った。大きな桶に仕込み醤油作りが行われており、見学後、「米

陸太田を訪ねて」という参考資料を頂いた。今回お世話になりました先生方、事務局の方々に深謝し、次回を楽しみにしています。

ふるさと歴史講座現地巡りに参加して

栗木幹生

今回の場所は、幾度となく訪れたことのある場所だつたが、専門家の先生方の説明を聞くことができ、さらに深く学ぶことができると思い参加した。

最初に訪問をした醍醐山願誓寺は、本堂が完成し、木の香漂う中で話を聞くことができた。寺の開基由緒について詳細に知ることができた。また、寺の正面に以前からあつた光圀公が詠んだ観月の歌碑がきれいになり、読み取ることができ、大変勉強になつた。

相川地区に入り、越方神社の由緒と歴史の古さについて知ることができた。神社の橋は「太鼓橋」というのだと思つていたが、「反橋」ということを初めて知つた。

次に上金沢の浄土真宗親鸞の聖人の孫如信上人終焉の地として話を聴いている法龍寺に着いた。この寺も延宝二年光圀公が巡村の折如信上人の墓に参詣したとき、堂宇をたて庇護を受けたことを初めて知つた。また、境内に生い茂つている樹木の大きさに寺の歴史を感じた。

鷺子山頂に遷座している鷺子山上神社については、將軍源頼朝の社殿修理の献納があつたことや八溝山塊の下部から鷺子山塊の地層の山にあり、昔から国境にあることを知ると同時に、その同じ敷地内にある伍智院の存在を初めて知つた。また、その内部を見学して、奥座敷の上段の間で光圀公が何度か休憩したという話を聞いている時、大子町上野宮の旅沢家の部屋の上段の間のことが思い出された。

午後の吉田神社については、三浦杉と呼ばれる大きな二本の杉の木がある神社としか記憶になかつたが、光圀公の八幡改めにより吉田神社になつたという話は初めて知つた。また、神木

三浦杉の由来について知ることができた。

今回初めて知つた驚きは、現在公開されている映画「桜田門外ノ変」において、幕府の井伊大老暗殺に関わった水戸浪士の一人である海後磯磯之介が事件後高野家に隠れ、数年間過ごしたゆかりの潜居碑があることであつた。彼は生き延びて明治維新後は、東京や郷里茨城で警察官として活躍したことを知り、改めてびっくりした。

今回の現地巡りは、光圀公が三十四歳で藩主になつてから水戸からの遠隔地であるのに、幾度となく訪問をしたのはなぜかを考えるとき、以前は佐竹氏の支配地であったので、その後の人々の動きや民情、各資源の状況等について家臣から報告を受けるだけでなく、自分の目、耳で遠隔地の実情を知る必要があつたからではないかと思われた。

この講座に参加させて頂き、講師の先生方をはじめ、現地関係の皆様に深謝いたします。



伍智院長倉宮司さんの説明



高野宮司さんの案内・説明後、記念写真

平成二十一年度ふるさと歴史講座現地巡り

大子町教育委員会では、郷土の歴史を現地で学び、大子町を再発見することを目的として、毎年「ふるさと歴史講座現地巡り」を開催している。今年度は二回開催し、水戸藩開藩四百年に因んで「徳川光圀公ゆかりの地」を探訪したので紹介したい。

第一回は、九月二十六日（日）に、平安末期から江戸時代まで約四七〇年間、常陸太田を本拠地とした佐竹氏ゆかりの社寺や「水戸黄門」の名で知られる徳川光圀公の隠居所「西山荘」をはじめとした水戸徳川家に関係の深い史跡などが数多く残っている常陸太田を訪ねた。

①佐竹寺（本堂・国重要文化財）

地元の観光ボランティア「常陸太田まちかど案内人」の方から説明を受けた。往時をしのぶ建物は、本堂のみである。寺院本堂は珍しく北向きに建てられている。坂東三十三観音二十二番霊所にも当たり、当日多くの巡拜者が訪れていた。

②西山荘

引き続きまちかど案内人の方から説明を受けた。建物は茅葺の質素なもので、華美を嫌った光圀公の人となりを伝える。「心の字を裏返しにした形の池があり、「文字と人の心は裏から見よ。」の意が込められている。

③久昌寺、義公廟

神部貫首から寺の由緒、光圀公との関わりについて講話をいただいた。光圀公は、延宝五（一六七七）年、生母谷久子の冥福を祈るために、水戸にあつた経王寺を稻木の地に移し、新たに寺院を建立し久昌寺とした。三昧堂檀林を設け、多くの僧侶を育成した。幕末の混乱期に荒廃し、明治三年に末寺蓮華寺に移転し、久昌寺と改めたとのこと。

④ヨネビシ醤油（東洋人初の医学博士「佐藤進男爵」の生家）

高和社長自ら工場内を案内して説明してくれた。歴史的な建造物や機械が、現在も使われている。木桶仕込みにこだわった醤油づくりが続いている（二度仕込み。木桶は、高さ・直径九尺（約三m）で大正時代製作）。最後には、見学のお土産として「米菴醤油」ミニボトルをいただいた。

⑤若宮八幡宮

応永年間（一四〇〇年頃）佐竹氏第十二代義仁が鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）から太田城内に勧請。水戸徳川家の崇敬厚く、元禄五（一六九二）年光圀公が太田郷の鎮守とした。境内には櫻の巨木が数本たっており、県指定天然記念物となっている。境内入口右側には、鋳鉄製大灯籠があり、鋳物の町として著名であつた常陸太田の往時をしのぶ。

⑥舞鶴城跡

佐竹氏第二代隆義が入城する日に、鶴が城の上空を舞いながら飛んでいたことから「舞鶴城」と呼ばれるようになつたといわれる。市街地化が激しく、現在ではほとんど遺構が残っていない。太田小学校の敷地内に石碑があるのみ。

⑦山寺晚鐘の碑

水戸藩九代藩主徳川斉昭公が「水戸八景」に選んだ景勝地。旧久昌寺の三昧堂檀林の跡である（現在「茨城県立西山研修所」）。大規模な施設で、常に数百人の学僧が勉学に勤しんだといわれる。六つ時に鳴る山寺の鐘の音は、山の谷間に静かに響いたことであろう。

⑧雪村の碑

室町時代の水墨画家で禅僧。常陸国部垂（現常陸大宮市）に佐竹氏の一族として生まれる。碑の揮こうは、横山大観。雪村由来の「雪村うちわ」は、西ノ内和紙に絵付けをしたもので、

光圀公も愛用したといわれる。

第二回は、十月二十三日（土）に、光圀公の大子地方巡村ゆかりの地である大子町西部及び常陸大宮市美和地区を訪ねた。

①醍醐山願誓寺

堀川真澄住職から寺の由緒、光圀公との関わりについて講話をいただいた。光圀公は、元禄三（一六九一）年に現在の地にあつた真言宗の寺を潰し、そこに引寺を命じたとのこと。境内には、光圀公の詠んだ歌碑がある。

②越方神社

光圀公が大子地方巡村の折、鷺子から入り、越方神社で休憩したといわれる。はしか除けの神として信仰され、神橋をくぐると病難をまぬかれるといわれる。

③法龍寺

親鸞聖人の孫である如信上人の終焉の地である。願誓寺は、同じ宗派である法龍寺が無住職の寺になつていた所から法龍寺に近い今のに移され、兼務を任せられたのである。

④明神峯（車窓から）

往古、陸奥国では国界を明確にするために、二つの境界神（小祠）がお互いに反対の土地に設けられていた。現在、茨城県側で栃木県側に建てた小祠は、破損、腐蝕して見当たらない。

⑤鷺子山上神社・伍智院

長倉樹宮司自ら神社や伍智院を案内して説明してくれた。茨城・栃木県にまたがる珍しい神社。近年、フクロウ信仰により参拝客で賑わうようになつた。光圀公は、延宝元（一六七三）年と元禄八（一六九五）年の二回訪れ、伍智院上段の間で休憩したことのこと。神社境内でも山門が設けられ、正面には随神像が裏側には仁王像が安置され、古くから神仏混合の形式を持つていた神社であることがうかがえる。

⑥吉田八幡神社・三浦杉・海後磯磯之介潜居の碑

予想外に帰郷中の高野守宮司（衆議院議員）自ら神社・三浦杉・潜居の碑を案内して説明してくれた。もと鎌倉杉と呼ばれていたが、元禄八（一六九五）年光圀公が参詣の折、偉大なことを賞賛、時の神官高野但馬守に杉の由来をきき、「しかば、三浦杉と称するのがよからん」といわれたとのこと。

海後磯磯之介は、桜田門外において幕府の井伊大老を暗殺した水戸浪士の一人である。事件後実兄が吉田八幡神社の神官田野久米之介であつたことから、事変後同家に潜んだという。

⑦道祖神碑（町指定文化財）

アツブルラインの大沢入口にある。親鸞聖人が巡錫の折、道に一夜を明かし、御難を避けるために、原画を描いて立ち去つたという伝承がある。

参加者の皆様、そして大子町歴史資料研究員の先生方には大変お世話になりました。来年度も新しい企画をして参りますので、多くの参加をお待ちしております。
（皆川）

編集人 斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（元 教員）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圓彦（元 教員）

斎藤 裕也（大子町教育委員会）

皆川 敦史（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室氣付
久慈郡大子町池田二六六九番地